

平成20年度 現代的教育ニーズ取組支援プログラム

「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」

- 持続的に “ 関わり続けるという定住のカタチ ” による21世紀のふるさとづくり -

第9回公開講座 「丹波を知る」「地域再生」

日時 2008年7月19日(土) 13:00~16:10

場所 関西大学 千里山キャンパス 第四学舎3号館3101

プログラム

13:00~14:30 「丹波を知る」

「丹波で『田舎体験』をプロモートする」

小橋 昭彦 (特定非営利活動法人 情報社会生活研究所 代表理事)

14:40~16:10 「地域再生」

「New Ruralism(新・田園主義)」

林 まゆみ (ランドスケープアーキテクト 淡路景観園芸学校准教授)

現代GP「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」は、関西大学と丹波市が持続的に交流することによって、フィールド・体験型の教育と21世紀のふるさとづくりをめざすプロジェクトです。丹波市青垣町佐治地区における空き家リノベーション、交流ワークショップ、滞在型ワークキャンプなどとともに、学生と住民が共に学ぶ公開講座(『丹波を知る』『地域再生』)を毎月開催しています。第9回公開講座は、以下のような内容でした。

1 公開講座の報告(概要)

丹波で『田舎体験』をプロモートする

京都、東京でIT関連事業を行っていたが、約7年前にUターンし、仲間とNPOを立ち上げ、丹波の魅力発見やまちおこしを行っている。「情報緑化事業」は、ブロードバンド回線を整備したもので、「心のふるさと事業」では、丹波の日常的な魅力を再発見し、情報発信するホームページ「田舎TV」を立ち上げ、住民に投稿してもらったり、“草むらカメラ”で畑の様子を紹介した。オンラインだけでなく、丹波を歩いてもらう「里山ウォークデー」や畑で苗植えや収穫をしてもらう農業体験なども行っている。

活動を継続するためには、丹波の人々に日常的な魅力に気づいてもらう地道な活動に必要な「虫の目」、都会の大人や子どもに田舎体験の魅力を知ってもらうために田舎と都会をつないで見る「鳥の目」、地域の活動を50~100年と継続させていくように時代を泳ぐ「魚の目」が必要だと思っている。

田園風景を特徴づける灰屋、わら草履づくり、柿とりや栗ひろいなど、丹波には魅力的な風景や遊びが残っている。そのために、ありふれた情報を入れた地図や牛舎を用いた博物館をつくった。「はたけスーパー」は、お金を入れて道具をもらい、畑に行き収穫する“田舎体験を販売する自動販売機”です。「田舎のおばあちゃん」は、登録しておくとうちのおばあちゃんからのようにメールが届くものです。“おばあちゃん”には、トレーサビリティにはない“安心感”や“やすらぎ”がある。おばあちゃんに会いに行こうと思ったときに、受け入れられる田舎体験の仕組みをつくりたい。

丹波で活動するためには、「伝統的な組織を否定しない」「リアリティのある外との交流をもつ」「相手の魅力を受け入れて頼む」の3つの条件が必要だ。そして新しいことをやるためには、既存の組織の理解と協力を得るためにも、新しい組織をつくるのが効果的だ。地域の活性化には、よそ者、馬鹿者、若者が必要だと言われる。よそ者は外のネットワークを活かすように、丹波に住む私も「よそ者」の側面を持ちつづけたい。これからは“家族のつきあいのような田舎体験”をつくっていききたい。



丹波の田園風景



“おかえり”の懐かしさが丹波の魅力

New Ruralism (新・田園主義)

都市では単一の価値観の中での暮らし方が求められるが、田園では、アート、花、緑、食などの価値観の中で、新たなコミュニティを形成できる。新・田園主義は、研究中のテーマであるが、地域の情報や成果を様々な媒体や人を通じて世界に発信する中から可能性が生まれと思っている。

先日、ヨーロッパに出かけた。ロンドン、アムステルダムから、アベルドームという田舎町に着いてホッとした。大都市のリニアな価値観に対し、田園にはノンリニアで多様な価値観があるからと思った。田園地域の例として、淡路の暮らしや風景、まちづくりの取り組みを紹介したい。

淡路は、農の風景、海の風景など、自然景観が美しい。祭祀空間（地蔵、社日、明神、地の神、荒神など）も多い。公共空間や市民の庭を用いたオープンガーデンも盛んである。淡路瓦を用いたオープンガーデンが様々に試みられ、地域の産業振興にも役立っている。「あわじオープンガーデン実行委員会」が中心になり、ツアーの開催や物産販売なども行い、人々の交流や地域の活性化にも貢献している。地域の中で農業や水、まちづくりを考えていく「農地水環境保全隊」の取り組みもある。「淡路島公園を楽しもう会」は、里山を浸食している竹を用いた炭づくり、自然観察会や子どものための園芸教室の開催、種から苗を育てて植える花壇づくりなどの活動を行っている。

淡路では、かつて宮崎のような観光地にしようと、在来の木を切ってヤシを植えた時期があったが、近年は公園島、環境保全、自生種、花と緑でおもてなし、緑のコミュニティデザイン等をキーワードに、淡路の本来の自然や植生を生かした公園島構想が進められている。

景観園芸は、生活や土木、建築、造園、園芸など、本来は一体となって生活空間を形成すべき分野の間に関連性を取り戻し、まちづくりを経済優先ではなく、自然や風土を見詰め直す文化的行為として位置付けようとする学際分野だ。定員 20 人、教育期間 2 年、景観園芸のプロフェッショナルを養成する淡路景観園芸学校は、平成 21 年度から専門職大学院になる。多くの方に来ていただきたい。



個人のオープンガーデン



生態観察会

2 公開講座の成果と今後の事業への反映

今回の講座を通じて、丹波と都市の双方を見据えつつ、丹波の魅力を再発見し、地域の活性化に生かしていく取り組みが始められており、それらは比較的若い人々による新しい組織が既存の組織と連携する形で進められていることを知った。また淡路でも、田園地域の魅力と資源を生かしつつ、まちづくりの様々な取り組みが行われていることを知ることが出来た。さらに田園は、アート、花、緑、食などの多様な価値観の中で、新たなコミュニティを形成できる可能性を秘めていることも教えられた。これらは、丹波をフィールドに、地域の活性化や 21 世紀のふるさとづくりをめざす私たちのプロジェクトに様々なヒントと励ましを与えてくれるものである。

関西大学現代 GP「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」では、今回の講座で得られた知見をふまえ、丹波地域の方々とともに、歴史や風土に育まれた地域の資源や魅力を活かした町家の再生やまちづくりを進めるとともに、新しい故郷づくりやまちづくり人材の育成に寄与したいと考えています。

3 参加人数と業種

45名（内訳：大学教員 5名 大学生 23名 高校生 0名 一般 17名）

最後に、多くの皆様のご参加をたまわり、ありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。